

とらいあんぐる菅生

発行:菅生中学校区地域教育会議
編集:情報委員会
当番校:菅生中学校 TEL: 977-8787
事務局:菅生こども文化センター

http://sugaochikyuu.web.fc2.com E-mail:toraianguru@mx81.tiki.ne.jp TEL&FAX 976-0444

校長先生を訪ねて: 1 稗原小学校の巻

岡部養一校長先生

あまりにも似ているので児童の作品を写真代わりに掲載しました



校長先生への手紙

稗原小学校の校長室の前に「校長先生のポスト」が置かれています。その中には子どもたちから校長先生へのさまざまな内容の手紙が入られます。そのことについて校長先生にお話を伺いました。

手紙からもらう元気

今年度より稗原小学校に校長となって着任し、教頭であった前任校で校長が行っていた「校長先生への手紙」をぜひやりたいと思っていたところ、稗原小学校では前校長も実施していたので、引き継いでやっています。

4月からこの間に、600通を超える手紙が入っていました。内容は、低学年では「こうちょうせんせい、まいにちあいさつありがとう。だいすきです」「おしごとがんばってください」など励ましやお礼の手紙が多く、高学年では「男子更衣室を作ってください」など要望の手紙が多いです。どの手紙も、子どもの素直な気持ちを感じられ、元気をもらっています。

返事は必ず

返事は必ず出すようにしています。土曜日に書いて、月曜日に渡しています。

て、月曜日に渡しています。

中には「校長先生は学校でどの人が好きですか？」と返事に困る手紙もありました。

手紙はコミュニケーションの力を養う

文章を書くことで表現力がつきます。日記でも良いのですが、手紙は相手のことを思いやって書くので、コミュニケーションの力もつきます。

お世話になっている地域の人たちにも、お礼の手紙が書けるようになれば、地域の人たちともっとかかわりをもつことができるようになるのではと思っています。

返事を出すのは大変ですが、すべての子どもたちからの手紙を待っています。

取材を終えて

校長先生は、今までもらった手紙を「宝物です」と全部大切に保管されていました。

子どもたちにとって何が必要か、何が良いことなのか、いつも考えてくださる校長先生に見守られて、子どもたちは幸せだなと感じました。



♪菅生音楽祭盛大に開催♪

12月5日 菅生中学校で!!

菅生中学校区地域教育会議主催の菅生音楽祭が、「地域で支えあい、生きる力を育てよう。勇気を持って、一步を踏み出せ!」をテーマに12月5日に菅生中学校体育館で開催されました。

音楽祭は今年で第6回を迎え、回を重ねるごとに地域にも浸透し、来場者も400人を超え、大盛況となりました。例年通り、地域団体のほか菅生中、菅生小、稗原小の子どもたちが参加し、子どもたちの発表に毎年生きる力をもろうという方もいます。

「当日は地域教育会議委員だけでなく、先生方や地域の方にお手伝いいただき、素晴らしい音楽祭になり感謝しています。次回もますます良いものになれば」と地域教育学習委員長は言っていました。

今、私たちにできることは？

菅生中学校区地域教育会議では、菅生分館（教育委員会）と共催して、家庭・地域教育学級を開催しています。その中で、図らずも、第1回の尾木直樹先生、第2回の福田誠治先生のおふたりが、フィンランドの教育やPISA(国際学力調査)を実施したOECD(経済協力開発機構)にふれ、世界の教育の流れの中での日本の現状をお話になられ、参加者から、自分の教育観を大きく揺さぶられたという声が聞かれました。講義の抄録と参加者の意見感想を掲載します。多くの方と「いま、私たちにできること」を考えたいと思います。なお、詳しい講義概要は、<http://sugaochikyuu.web.fc2.com> でご覧いただけます。



第1回学級の様子(尾木直樹先生)

今、教育に何が起きているのか 尾木直樹（教育評論家・法政大学教授）

世界では授業料無償があたりまえ

今、教育格差が広がっている。例えば、大学進学率は年収1200万円以上の家庭では62%だが、200万円未満では28%と差が広がっている。今や、世界では、生涯を通じて授業料無償があたりまえである。教育費は国費の最優先順位にある。教育は「人生前半期の社会保障」として、国家にとっての生命線、個人にとってのセーフティネットとなっている。

「学力」を測る一つの基準として、2000年からOECDがPISA調査を3年ごとに行っており、2009年には70カ国・地域が参加した。フィンランドはこの調査で3回連続トップとなっている。フィンランドが教育改革に入ったのは1994年。ソ連崩壊の影響で失業率が20%近くに達した中、29歳の教育大臣が「教育は未来への投資である」というスローガンを掲げ、小学校から大学院まで無償にした。その結果、2000年には学力が世界でトップになった。ちなみに日本は21位。

日本の教育方法は問題

60年代～70年代の高度経済成長期には暗記学力が有効であった。しかしOECDは現在の国際社会を 知識基盤社会 多文化共生社会 成熟した市民社会 リスク

・格差社会、ととらえている。いろんな民族、考え方、宗教が異なっている社会の中で共生していこうという流れにある。これだけ言論や報道の自由があり、IT化であらゆる情報にアクセスできる時代に、日本のメディアは世界情勢を報道せず、国民は知らされていない。

子どもも教師も生きづらい

日本の子どもたちは、多くの「生きづらさ」を抱えている。たとえば、子どもの貧困率は7人に1人で世界トップクラスである。授業料が払えないために卒業証書をもらえない。健康保険がない家庭の子どもは、学校の保健室を病院代わりにせざるを得ない。

また、昨年、ILOとユネスコの調査団が日本に入り、教師の過重労働に関して文科省と各地方自治体の教育委員会に勧告を出した。教員は1日平均11時間労働で、トイレにも行けない。ゆとりのない教師が、どうして良い教育ができるのだろうか。

子どもの参加によって豊かな未来を

豊かな国にするために、どんな国づくりをするのか。ヨーロッパでは、学校運営やまちづくりに小学生も参加している。自分たちの責任を自覚して発信・行動し、民主主義の思想が鍛えられていく。日本でも、ものごとを決めていく際に、子どもにも参加してもらい、子どもの力を借りて、子どもと大人が対等な社会をつくっていくことこそが求められている。

参加した方たちの意見・感想から一部抜粋

こんなに自分が無知だったのかと、立ち上がれません。子どもを何とかしようなんて事じゃなかった。自分が成長しなければ、何も変わらない！！

“学ぶ”という事は無償である、という世界から日本はかけ離れている事を痛感しました。日本をそして世界を知らなすぎる自分を知る事ができました。子どもの力を借り、子どもに参加してもらうには、大人が学ばなければならないし、柔軟でなければなりませんね。

日本の学校で勉強し、日本の中のことしかわからないという事が、今日の話でとてもよくわかりました。学習したいという意欲が持たなくなりかねない現状にあるということを感じ危機感を覚えました。自己実現できる社会を作っていくという意識を一人一人が持たなくてはいけない時期に来ているということ、多くの人が持たなければならないと思いました。

生まれた以上、人として教育を受けて成長していく...当たり前前かがい日本社会、そこがおかしいとデータを示して話して下さった。教育を受けられないのは“子”の責任ではない。親の責任でもない。貧乏は誰の責任なのか。教育を受けられない社会がオカシイ！！と今日は実感した。

	日 時	課 題	講 師
第1回	11月6日(金) 18:30~20:30	今、教育に何が起きているのか	尾木直樹 (教育評論家・法政大学教授)
第2回	11月27日(金) 18:30~20:30	私たち大人の「学校観」を問い直す	福田誠治 (都留文化大学副学長)
第3回	12月11日(金) 18:30~20:30	学校・地域・家庭の協働の可能性を探る	杉並区立井草中学校学校支援本部
第4回	1月22日(金) 18:30~20:30	自分自身の子ども時代を振り返ろう	大枝奈美 (アトリエウェイブ代表)
第5回	2月5日(金) 18:30~20:30	子どもたちの心に、何が起きているのか	北村年子 (ルポライター)
第6回	2月19日(金) 18:30~20:30	子どもの心に寄り添うために	西野博之 (子ども夢パーク所長)

私たち大人の「学校観」を問い直す 福田誠治 (都留文化大学副学長)

テストのないフィンランド

フィンランドでは中3の16歳まで他人と比べるテストがない。授業時間が少ない。塾もない。私が見た授業の様子では、編み物をしている子やかくれんぼや積み木で遊んでいる子、前の授業の延長で粘土細工にのめりこんでいる子がいて学級崩壊かと思うほど。自ら知りたいと思った人が調べてそれを理解し、納得し、整理したものがその人の知識だという考えを教育界がとっている。人によってもっている知識は違うもので、知識はそれぞれ違ってよいのでテストで比べる必要がないという教育観がある。6年間かけてこのくらいやろう、9年かけてここまでやろう、学ぶ順番やスピードは生徒に合うように教師が支援するというスタンス。教師は異動がないため地域のことをよく知っていて、そこに生きている子どもたちに最も合った授業をしている。

自分の将来のために学ぶ

フィンランドでは、考える力を養う教育を1970年代からつくってきた。1994年には大改革を行ない教科書検定なし。教員評価なし。現場に全権限を与えた。「子ども自身が自分の将来のために学ぶ」という教育を徹底すれば、全体の学力は高くなる。この点に、OECDと

EUが目し、「フィンランドの教育は未来型であり、持続可能な経済成長を可能にする」とみている。

日本の子どもは知識は豊富だが

2000年にOECDはPISAを始めた。道具としての言語・情報、数学、科学を使う一般的な力を測定することにした。日本のテストの多くは正解は1つであるが、PISAでは採点者が予想もしない答えが出てくるとも想定している。OECDの事務総長は「日本の生徒は、知識は豊富だが、知っていることから類推し知識を応用する必要がある場合は成績が下がる。生徒が単に科学的な知識を記憶し、その知識とスキルを再現することだけを学習しているのだとすれば、多くの国の労働市場からすでに消えつつある種類の仕事に適した人材育成を主に行っているというリスクを冒している」と結果を分析して見せた。

日本は学ぶ力を育てられるか

人間は環境や状況によって学ぶもので、全国一律の教科書で学ぶという学力観こそが低学力を作り出しているのではないか。国際数学・理科教育動向調査の結果によると、日本の子どもは、成績は良くても勉強は楽しくなく、自信がないことが判明している。固定した知識を伝達するのではなく、学ぶ力を育てることこそが最も重要だとする教育が、フィンランドなどを中心に実践されており、このような長期戦略にOECDとEUが踏み出したことに日本の学ぶべき課題がある。

参加した方たちの意見・感想から一部抜粋

お話を聞きながら、自分の子どもの事や学校の子どもたちについて考えていました。自分のために勉強しているのか、と考えるとやはりテストのために勉強していると思われる。将来を見ずえて、必要な時に知識を得ようとする意欲や、問題解決・判断する力を育てることが大切だと思いました。

フィンランドの教育の内容など具体的なお話でとてもわかりやすかったです。これから、国際社会の中で生きていく、日本の子どもたちには何が必要で何が大切なのかということも、もっとお聞きしてみたかったです。

私は「みんなちがって、みんないい」という言葉が好きです。今、まだまだ競争が残っている教育の中で「みんなちがってみんないい」と思う私の心とその社会が、どのように共存していくかは、わたしの学びであると思います。

「受験のための勉強、テストのための勉強」果たして、これで子どもたちの「生きる力」が育つのだろうかと思いました。諸外国で成果がでた取り組みを知り、日本人に合う形で様々な教育改革が必要である、子どもたちの未来のために柔軟に物事をとらえていくことが大事である、と感じました。

「一人ひとりが違って、協同する社会」教育とは少し違う視点かもしれませんが、地域社会からこの視点で大人が行動していくことで何かつながるかなあーと漠然と思いながら、おききしてました。



12月8日、中学1年生、2年生男女17名による21年度の子ども会議実行委員会が始動しました。自分たちが住んでいる菅生のまちづくりについて、子どもの視点で考えていきます。放課後は部活動などの活動もあるため、実行委員会はわずか1時間という設定ですが、「まちづくり」のイメージづくりに向けてのスタートラインに立ちました。4グループに分かれ、菅生のまちの「好きなところ」「いいところ」「嫌いなところ」「こうなるといいなあ」についてそれぞれ感じることを出し合いました。好きなところ・いい

ところは、「富士山が見える」「緑が多い」など自然環境に対する意見が多く出ると共に、「地域の人が親切、優しい」といった嬉しい意見も。嫌いなところは、「外灯が少なく暗い」「遊ぶ施設が少ない」など。こうなるといいなあ意見は、「外灯を増やして明るい街に」「川で自由に遊ぶ」などでした。今後はこれらの意見をもとに、どんな「まちづくり」がいいか、自分たちは何ができるかを月1回のペースで考えていきます。
(子ども会議担当：川原・植村先生 事務局：生駒みを・佐藤利枝)



全市

第12回「かわさき子ども集会」

子ども会議の様子

子どもたちの意見が市長に提言される機会か

子どもたちが川崎の現状や将来について話し合う「かわさき子ども集会」が12月20日、川崎市高津市民館で開かれました。主催は同集会実行委員会。集会の企画は子どもたち自らが行き、今回のメインテーマは『かなえよう、川崎の夢を』と設定されました。集会には市内の小学4年生から高校3年生まで75人が参加しました。

今夏の沖縄から北海道までのサマーキャンプの話や、川崎区、中原区、高津区など子ども会議の活動については参加した生徒全員が地区ごと登壇し報告しました。報告内容は会場内に設置のパネルに写真入りでも説明されていました。

続いてフリートークが行なわれ、学校や環境、福祉などをテーマに参加者が意見交換しました。

*先生が生徒を男女の差別をしている

*学校でのいじめがひどい

<いじめの相談窓口が必要>

<いじめ対策としては、信頼できる友達を持つことが有効>

*街の緑化活動

<フラワーロード、グリーンカーテン>

*街にゴミ箱が少ない

*バリアフリーがすすんでいない

子どもの視点での率直な意見は後日整理され、川崎市長に提言される予定です。

実行委員長を務めた高校1年の男子生徒は、「学年が違っても問題意識は共通している。活発な話し合いができて良かった」と話していました。

取材を終えて、子どもたちの意見が市政に反映されることを見守りたいと思いました。

活動報告

パネル報告

フリートーク



菅生中学校区地域教育会議

公募委員になりませんか?

菅生中学校区地域教育会議事務局

TEL 976-0444

(菅生こども文化センター内)

地域教育会議とは

「川崎の教育を市民参加のもとに考え、市民が自らの責任として教育を行うための自主的民主的な組織」(川崎市教育懇談会提言1986年)として、川崎市の7行政区、52中学校区に創設されたものです。菅生中学校区地域教育会議は、1994年に発足、この地域のさまざまな教育問題について考え、行動してきました。

会議の構成は

P.T.A・子ども会・自治会・防犯・青少年指導員・民生委員・こども文化センターなどの地域選出委員、小中学校の先生方・地域の公的機関委員などですが、もう一つの構成員として、公募委員があります。

公募委員とは

「菅生中学校区に在住・在勤・または中学校区でボランティア活動をしている人」が対象です。任期は2年ですが、随時参加していただくことができます。参加をご希望される方は、事務局にお問合せください。